

December 2008, Volume 14

特集1

## 地域を基盤とした教師養成教育モデルの開発

SAT (学生アシスタント・ティーチャー) プログラムの取り組み ― 特色GPR ―

特集2

フィールド・ミュージアムの展開と「現代GRP」(山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取り組み)

巻頭言

子ども時代からの新羅万象・

津田櫓冬



都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子

絵 成瀬洋平 (本学卒業生)

# 子ども時代からの 森羅万象

津田 櫓冬

「森羅万象」という言葉を知る以前に、子ども達はいつの時代も、この世に生を受けて以来、《目に見え、耳に聞こえ、鼻でかぎ、手で触れ得るもの》から、《目に見えず、耳に聞こえず、鼻でかげず、手でさわれないもの》とも、向き合ってきました。

日本海に面した丹後半島の西側の基部には7km続く白浜青松の海岸があり、その西端の細い湾口の内側には、山々に囲まれて、内周20kmの、7の字に似た汽水性の湾があります。

ぼくは、その湾奥にある小さな町、久美浜で生まれました。冬は、外海の砂浜に打ち寄せる荒波が海鳴りとなつて轟く日が増え、大いに不安にかられました。夏は一転、南国の海に様変わりです。

小さな町ですが、江戸時代には幕府直轄の代官所があり、明治の廃藩置県の際、四年間久美浜県庁所在地でした。といつても当初は三府三〇二県でしたから、その数の多さに驚きます。

◇ 一九四五年八月二五日、終戦の年が国民学校一年生。食べるものが極端に不足の時代で、チガヤ（つばや）の穂や、すいばを噛み、イタドリをかじりました。絵の具まで試し舐めし、黄色はにがく、赤色が甘かったのを覚えています。

そんな中であつて、山桑の木に登つて食べた桑の実最高の味。口を紫色に染めながら時間を忘れて食べ続けました。

二年生の時、近在の村にある父の実家に行き、伯父たちと囲炉裏を囲んでいると、薪を火にくべていた従兄が、かみきりの幼虫を薪の中から取りだして火で焙り小皿に数匹のせてよこしました。

香ばしく素朴な味でした。従兄の手慣れたしぐさと、昔からの食習慣だといわんばかりの大人達の顔が、「安全食品保証書」でした。

春先には、シラウオが海から川に遡上してきます。どの川にも小川にも梁が仕掛けてあります。四年生の

頃、その間隙をすり抜けてくるシラウオをたもですくい取り、生きたまま口に入れ、苦し紛れにはね回る触感の心地よさと、もしもこのいたいけな小魚が自分だったらと、胸をかすめる罪悪感もいっしょくたにして飲み込むのでした。

又、昼休みや放課後、小学校の裏山に上り、自生している落葉低木で和紙の原料、雁皮(がんび)を見つけてると、その内皮をナイフで削り取ってガム代わりに噛み、わずかな甘みに小躍りしたものでした。

◇

秋に祖母と山へ野生のナメタケ狩りに行った時の事、山を下る途中、緩やかに傾斜した窪地の前で足を止めました。落ち葉が分厚く堆積しています。たまたま傍に、何かの都合で放置されていた細い鉄棒がありました。その鉄棒を手にとり、落ち葉がどの位溜まっているのか差し込んでみましたが、落ち葉の堆積は深くて小学四年の背より長い鉄棒が地盤に届きません。

あきらめて鉄棒を引き抜いたその時、心地よい香気が鉄棒の後からついてきました。

それは、落ち葉が虫や細菌によつて分解される途上の副産物なのでしようが、その時感じたものは、山懐からの、えもいえぬ神秘的な息づかいでした。

小学五年から中学三年まで、毎年夏になると遠泳がありました。

小学校横の海岸から午前八時頃出発し、湾内に突き出た岬までの3kmを往復するコースでした。

その頃は、小舟を持つ家も少なからずありました。生徒の父親等と子舟十数艘が遠泳に参加し、二列になって泳

ぐ子ども達の長い列の左右に付き、太鼓とかげ声で拍子をとりながら伴漕してくれるのです。6kmのコースを完泳すると身体がすっかり海になじみ、ようやく戻った出発地点を歩く足取りも地に足がつかない感じでした。進化という長い道のりへ向けて旅立った我が先祖の魚達が、海から陸地へ上がって行く時の気持ちを推測しました。

やがて、講堂に入ると、そこには膳台がずらりと用意されていて、大勢の母親達が待機し、次々に帰って

くる子ども達に、熱い味噌汁と粥をよそってくれました。冷えきっていた身体は急速に温まり、夏の気温も加わって夕方まで身体は火照りは治まりません。昼時の熱い体験と同時にやきついていてるのは、《自分達を守ってくれているのは、自分の親だけではないのだ》と気付かせて貰ったことでした。

◇

中学二年の夏、夕食後、家から一二〇分程歩き岸辺から海に飛び込みました。

夜の海は、腕でひと搔きする度に夜光虫が光り、時折、魚が反転して青白い光跡を残します。

仰向けに浮くと、夜空には無数の星が見え、流星が走り、宇宙に漂っている気分です。「宇宙は有限か」といった新聞記事を思い出し、「有限である」とすると、有限の宇宙の外側にそれを包む空間がある筈。その空間も有限だとすると、更にその外側が・・・と組み立てていくと、誰がなんと言おうと宇宙は無限であると判断せざるを得なくなりました。

しかしながら、無限の宇宙空間という途方もなく壮大な不条理の下で、地球上の法則や条理を基盤に生きる事との辻褃が合わなくて、その後もしばらく、心は宙に浮いたままでした。

◇

以上が、子どもの頃体験した断片です。時代の変化に伴って激変する子ども達の環境も、ぼくににとっては子ども時代から向き合ってきた「森羅万象」の延長線上であり、そのことも併せて、今もって抱き続ける関心事です。

(つだ ろう・画家、「日本子どもの本研究会」副会長





## SAT (学生アシスタント・ティーチャー) プログラムの取り組み - 特色GP -

地域交流研究センターの事業として取り組まれてきたSAT (学生アシスタント・ティーチャー) を軸にした「地域を基盤とした教師養成教育モデルの開発—学習支援を通して〈子ども体験〉の深化をめざす

学生アシスタント・ティーチャー・プログラム」が、平成19年度の文科省・大学基準協会の「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP) として採択されました。その実践の展開を特集します。

### 教師教育改革の 国際的動向に学ぶ

佐藤 隆

現代における教育の困難と専門職性の動揺  
のなかで

いま「新しい荒れ」の問題や「学級崩壊」現象などの教育問題が社会問題化するたびに、「学校はどうなっている」「教師の力量不足のせいだ」という学校・教師批判が噴出するというパターンが定着したといえます。

こうしたなか、教員の資質・能力開発という名のもと免許更新制や人事考課など新たな政策が導入されています。教員養成においても「教職実践演習」に見られるように、教師として求められる「資質・能力」を国が決定したうえで、それを大学にカリキュラム化させるといった動きが強まっています。また、その際には、学生の現場経験の必要性を強調するとともに、教職経験者あるいは教育行政関係者などの現場関係者による学生指導・評価を、大学に求めるようになってきています。

たしかに学生が、現場の実態を知り、そのなかで学ぶということはきわめて重要なことですが、そこでの経験を自分のなかで反省し、研究的に取り組むことを抜きにしては、学生それぞれが「どんな教師として生きていくのか」を考えるものとはなりません。

## 教師教育の世界的な動向に目を向けること

本学では、このような問題意識から、学生が自らの「子ども体験」を深く考察し、その意味を問うことを通じて教職へ展望を切り開くことをめざして、都留市全域でS・A・T活動をはじめました。同時に、こうした活動が世界の教師教育とどのような関連があるのかを確かめるために、フィンランド・オウル大学とカナダ・サイモンフレイザー大学における教師教育に学ぶことを本学が選定対象となった特色「GP」の軸のひとつに位置づけています。

二つの大学への訪問調査を通じて確かめられたことのひとつは、両者ともに、「専門知識の教授・伝達」型からの脱皮をめざしているということですが、だからといって、日本の教師教育改革のように、「実践的力量」形成と称して現場対応的職務遂行能力の形成に大きく傾斜し、教師教育における研究的要素を極端に排除しようとしているのとも違います。例えば「教育と子どもの事実」を基盤にした新たな教育学とそれを中軸に据えた教師教育がめざされていると

いってよいかもしれません。



## フィンランド・オウル大学の場合

私たちに印象深かったのは、シムとよばれる実験施設で、子どもたちの行動を記録し、その意味の解釈を学生たちが議論しながら、子どもの思考過程やそこへのおとなの関わり方などを調査研究しながら、学生が「子ども体験」を豊かにしようとしていることでした。教育実習も、単に「覚える・慣れる」ためのものとしてではなく、研究対象として扱うという意識がはつきりしており、実習と「ゼミナール」とが交互に行われ、それらの活動を通して、「卒業論文」のテーマが決まっていくという流れができていました。また、実習は自分自身の実践スタイルを探すためのものであると明確に位置づけているということも、一律に教師の資質・力量を決めるのではなく、さまざまなタイプの教師がいて当然とする多様性を重視するものであることの証明だと感じられました。

## カナダ・サイモンフレイザー大学の場合

同大学の教師教育プログラムは、カナダの教師教育の中でもユニークな存在として知られています。それはまさに地域に根ざす教師教育のひとつの典型を示していると言ええるからです。というのは、教師教育に際しては、地域の現職教員を期限付きの大学教員として採用し、専任教員とチームを組んで学生の指導にあたるからです。このようにして、大学の理論的蓄積と現職教員が持っている実践知がより合わり、相互に刺激を与えあうという関係が生み出され、学生にもまた両者を有機的に学ぶ機会が与えられるように工夫がなされています。また、

大学へ「出向」した教師が「現場」に戻ることを通じて学校改革を進めていく戦略を明確に持っていることです。

もう一つ重要なことは、多元的な価値観を受容することが必要なカナダ社会では、サイモンフレイザー大学に限らず、教師には柔軟な発想と他者との協働をいとわれない態度が必要なものとされています。こうして教師の資質・力量は個人的に獲得するということよりも、教師たちの協働で発揮される力の意味を学ぶことが実践と理論的研究のどの部分でも重視されていることです。

## 二つの大学との交流を通じて

私たちは、いま述べた二つの大学の教師教育担当者たちとの交流をこの間進めてきましたが、両者に共通していたのは「現場経験」の大切さはいままでもないのですが、その経験を理論的に省察する機会が十分に保証されなければならないことを意識した制度設計がなされていることでした。それを通じて、学生が自らめざす教師像を自主的につくりだしていくことを援助することが教師教育の原則として根づいていることでした。また、教職の本質として、それらは個人的な力量形成だけでなく他の教師やそのほかの発達援助者と協働で育てていく力量がより重視されなければならないということでした。私たちが行っている教師教育（S・A・Tを含めて）が、こうした観点から見て、どのような改善が必要なのかを検討する上でも大きな示唆を与えてくれているように思えます。

（さとう たかし・本学初等教育学科教員）

## SAT活動と 子ども理解の カンファレンス<sup>(\*)</sup>

筒井潤子

今年度より「臨床教育学フィールドワーク」は、SAT-C(困難を抱えた子どもに個別対応をする)という位置づけで、小中学校6校にお世話になりました。これまで以上に「継続的な個別支援」を念頭に、丁寧な打ち合わせのもとで、活動を開始しました。学校と大学との連携には、まだまだ課題はありますが、一人ひとりの子どもの顔を浮かべながらの活動が進行中です。

学生は、個々に担当の子ども(相談室・特別支援学級という形での担当もあります)と関わり、その体験を持って大学に戻ってきます。子どもとの関わりの中で、多くのことを感じ、考え、悩み、しばしば悶々と苦しみます。困難を抱えた子どもと関わる援助者の内面的葛藤を体験しているのです。けれども前期の終わりには、こんな感想が、数人から届きました。「死にたいとか、みんなに嫌われているとか、なんて答えたらいいか分らないことが多く、話を聞くのがつらかったです。でも、あるときふと

気づくと、私は彼女に会うのがとても楽しみになっていました。つらい話を聞くのが楽しみという大変ですが、SATの役割が少し分かったような気がしています。」真剣に子どもに向き合う中で、自身自身の心の動きに目を向け、そこから「援助」ということの意味を深く考え始めています。

この活動を支える一つの大きな柱が、ケースカンファレンスです。一人の人の体験を皆で聞き、皆で考えあひながら、子どもを見る視点を広げ、自身自身の体験を振り返ってゆく時間です。様々な学生の感想が寄せられています。

「カンファレンスでは、学校による違いに驚かされたり、その中でも共感できるものが見つかったり、子どもとの関係に悩んでいるのは自分だけではないんだと安心したり、たくさんのかたちを感じ取りました。充実しているのですが、考えることが多すぎて疲れてしまうほどです。」「活動を活動だけで終わらせず、まとめて形あるものにして共有することのできる意味のある時間だと思えます。またみんなが自由に話せるまでにはなっていないので、私に出来ることを考えながら、感じたことを少しでも発言するようにしていきたいです。」「カンファレンスは、私たちの活動の意味を再確認できる場になっています。自分に体験のないようなケースを検討しているときも、何か自分の活動に通じるものがあつたりして、参考になることが多いです。それにくわえて、

去年よりも、各校ごとの集まりを積極的にやっているの、そこでもとても勉強になります。」「カンファレンスでは、私も報告しましたが、まとめる際にこれまでのことをすごく考えました。そのとき感じていたことを思い出したり、まとめるながら、そうだったのかと気づくことがあつたりして、自分自身を整理できたように思います。」

このようなカンファレンスを体験することにより、1対1の関係の中で、援助者に起こりがちな盲目的な自己満足、あるいは逆に無力感や傷つきなどに気づかされ、援助者が協働し支えあうことの重要性を実感してゆきます。また、その中で学生は、子どもと向き合うだけではなく、自分自身のあり方を振り返り、自分自身を見つめ、進路についても改めて深く問い直し始めていきます。カンファレンスは、子ども理解にとどまらず、援助者としての自分理解、一人の人間としての自分理解を深めてくれるもののように思います。

活動の深まりが、カンファレンスの深まりと連動しながら進んでゆくことを期待しています。

(つつい じゅんこ・本学初等教育学科教員)

<sup>\*</sup>子ども理解のカンファレンス…困難をかかえた子どもを理解するためのケース検討会





サット(SAT)を担う学生たちと先生方の感想を掲載します。一人ひとりの感想をおして実践内容を知ることができ、またその意味や可能性を考えることができます。

## SATに学ぶ学生たち 「子ども体験」を理論と結ぶ

本間由未子(初等教育学科・学生)

SATの活動を経験して、一人一人の子どもに向き合い、子どもを受けとめるということの大切さを感じた。大学では理論として勉強していたことが、実際に現場に入り体験することで私の中で結びついたように思う。初めて活動に入る時、教育実習をしていなかった私は、特別に支援を要する児童や乱暴な言動の児童に対し、どこか構えていたと思うし、入るからには「何かしなければ…」という思いがあった。

しかし活動をする中で、障害とその子を切り離して見るのではなく、この児童は困難があるけどそれを含めてこの子なんだ、乱暴な言動や気にかかる行動の裏には何か児童の思いがあるのかも知れないと考えが変化してきた。また特別に何かしようと思うのではなく、話したり、一緒に遊んだり、ご飯を食べたり共に学校生活を送る中で、児童の良いところや成長・笑顔が見え、その中で児童との関係が築けるのだなということを感じた。SATの現場で得られるものはとても大きいと感じている。

(ほんま ゆみこ・本学初等教育学科4年)





## 「受容」と「共感」の重要性を学ぶ

土屋 愛

私は週1回、Aさんと1対1で活動している。SATの活動が始まる前は、子どもとすっかりと向き合っていていけるのかなど不安でいっぱいだった。しかし実際に会うと、明るく元気に迎えてくれて、私の不安を和らげてくれた。

活動は、勉強よりも話をしたり悩みを聞いたりということがメインになっている。回を重ねていくと、楽しい話のみならず、学校や家庭についての悩みや、愚痴、抱えている想いなども打ち明けてくれるようになってきた。その中で、私はどう答えていいのか戸惑うこともあれば、なにもしてあげられない自分にもどかしさや辛さを感じることもある。しかし、今の私にできることは、しっかりと話を聞いて、Aさんを受け入れてあげることではないかと思うようになった。私自身、Aさんと過ごす時間が楽しく、一緒に笑い合えることが嬉しい。私はAさんにとって、先生でもなく家族でも友達でもない存在であり、だからこそ話しやすいこともあると思う。お姉さんのような、何でも話せる信頼できる居場所になれるばいいなあと思う。

(つちや めぐみ・初等教育学科3年)

## 子どもの学習支援を通して 見えてきた課題

志村阿希奈

私は、SAT-B(教室にチーム・ティーチング

として入って授業の援助をする)の活動に参加しています。週に1度、主に算数と国語の授業に補助として入っています。

授業中の机間巡視の際、私が子どもたちに「できたね」「解けたね」という言葉をかけることが多いことに気付きました。これは、私自身が子どもたちの出した答えにしか目がいついていないのではないかと思います。それゆえ、子どもたちがどのように考え、答えを出したのかという過程にもっと目を向け、具体的な言葉掛けを考えることが必要であると感じました。また、一つのやり方ではなかなか理解できない子がいました。どのようなことが理解できず、悩んでいるのかということを経験は把握し、他の方法を検討しながら学習指導の仕方を変えていくことの必要性を学ぶことができました。

これまでのSAT活動をを通して、自分自身の課題が明らかになりました。この課題に向かい合いながら、子どもたちが意欲的に学ぶことができるような学習指導のあり方を残りの活動を通して考えていきたいと思っています。

(しむら あきな・初等教育学科4年)

## 学校に新しい風を吹かせたい

高松祐介

私は、SATの活動を通して子どもを見る目が養われたと思います。SATに参加する子どもたちは、一人ひとり違った希望を持って参加しています。学校での学習をより丁寧に覚えたい生徒、自分が苦手な教科を克服しようとする生徒、また、若い先生(大学生)の創意工夫を凝らした楽しい授業を楽しみ

にしている生徒もいます。そのなかで、私は、SATという少人数で構成されたクラスのなかで一人ひとりと関わる時間を大切にすることにより、子どもたちの学習の対する意欲や心の内面を知ることが出来るようになったと感じます。

現代の教育現場は、一人の教師の抱える学級の子どもの人数が多く、子ども一人ひとりの要望に答えられず、ましてや課題や悩みに気づきにくい状況にあります。今後の可能性として、SATの大学生と学校の先生方との連携において子どもたちを多方面から支援していくことで、一人ひとりの子どもの教育的ニーズに答えられるのではないかと思います。

学校教育に新しい風を吹かせるSATに活動に期待したいと思います。

(たかまつ ゆうすけ・本学研究科臨床教育実践専攻)



## SATの学生とともに

秋山俊一

「先生、ここはこれでいいですか」「この問題の答えは、あつているよ」。集中して学習に取り組む子どもたちの姿。子どもたちの学習をよりよいものにするようにがんばっているSATのみなさん。

本校では、「児童の学力の向上をめざしてきめ細かな指導を一層充実させるため、児童のつまずきへの援助や学習意欲の向上を図ることをねらいとして、「国語科を中心とした基礎的な学習の定着を図るための学習指導をおこなう」「習熟度別に児童を二つのグループに分け、基本的な学習グループを担当が指導し、発展的な学習グループをSATが支援する」ことを実施しています。日々の学習のなかでは、きめ細かな指導や一人ひとりの実態に応じて行き届いた指導ができるという習熟度別学習に職員数の関係上、なかなか取り組めない状況にあります。そのなかで、今年度、SATのみなさんの協力を得て、習熟度別授業に取り組んでいることは、たいへんありがたく思っています。子どもたちも、進度に合わせた学習に取り組めるため、とても意欲的に学習に取り組んでいる様子がうかがえます。

SATの学生さん方も、事前に担任教師と学習内容について打ち合わせしたり、児童の実態に適した問題を作成したり、教材研究を熱心に行ったりして授業に臨んでくれています。

年間二〇回という限られた時間での習熟度別指導ではありますが、たいへん意義あることだと考えています。また、本校へ来ていただいているSATのみなさんは、担当の授業以外でも積極的に児童にか

わりを持って来てくれています。その姿勢はたいへんすばらしいもので、私たち教職員も刺激を受けながら、日々の取り組みを進めているところです。

「SATの先生との勉強は、とても楽しいよ」「先生、今度はいつ来てくれるの?」「先生、一緒に遊ぼうよ」。

SATの学生さんが来校する日は、いつも子どもたちの明るい声が校内に響いています。

(あきやま しゅんいち・都留文科大学附属小学校教頭)

## 子どもたちの笑顔を求めて

渡辺史江(東桂小学校教諭・SAT担当)

「先生、きょうはね、SATの先生(学生)と遊ぶの。」「いいな。なにで遊ぶの?」「先生には教えてあげない。秘密」と、にこにこしながら話しかけてくるQさん。

私たち教師は、ゆとりのないあわただしい毎日。Qさんの言葉から「児童と遊ぶ」大切さをあらためて気づかされた。「児童との遊び」から「児童の学習のつまずきへの援助」「児童の学習意欲の向上へ」と学生と教師とがスクラムを組んで取り組むSATも5年目を迎え、とても大きな成果を上げている。また、将来教職をめざす学生にとっても、学校現場での体験は何物にも代えがたい大きな力になることはまちがいない。

今年度も、大学・市当局の努力により、大勢の学生を確保できた。私は、本校のSAT担当となり、学生と教職員との連絡調整に生きがいを感じている。それは、子どもたちの笑顔が支えてくれているから





である。本校の取り組み事例として、AとBタイプを示す。

Aタイプでは、毎週水曜日の放課後の時間を活用し、学習上のつまずきの解消や学習意欲の向上を図った。児童は「SATでやったことがテストに出て、勉強が楽しくなった」。「プリントの種類がたくさんあってよかった」等、児童にとっても、SATの学生との学習を通して確実な成果が上がるものとなっている。

Bタイプでは、全クラスでTT（チーム・ティーチング）による学級担任との協力体制のなかでの学習支援活動をおこない、個に応じた指導を一層充実させた。基本的には、学生の所属を固定し、毎回同じ教室へ配属したので、子どもたちとのつながりが深くなり、SATの先生のおかげで学習に集中できる子どもも見られてきた。子どもたちの笑顔から学校が楽しいと活気が出てきた。

このように、本校の教員はSATの制度にたいへんありがたく思っており、どの学生も目を輝かせ、教員と連携し、たいへん熱心な取り組みをしてくれたことは、なによりもうれしかった。今後も、学生との連絡を密に取り、関係を深めることで、この制度を充実・発展させられるよう、本校ではさらに指導法の工夫・改善をしていきたい。

（わたなべ ふみえ・東桂小学校教諭、SAT担当）

# シオジ森の学校との連携： キャンプで成長した先生の卵たち

坂田有紀子

地域交流研究センターでは大月をベースに活動している「シオジ森の学校」<sup>※</sup>に平成17年度から学生と教員を派遣しています。この森の学校の講座として昨年からは学生の企画・運営によるキャンプ「森の生活を楽しもう」が開催されるようになりました。このキャンプでは、「森の生きものたちとの出会い」

をテーマに、ムササビや野ネズミ、水生昆虫の観察、草木染やビンゴゲームを子どもたちと一緒に楽しみます。今年度は小学生18人、大学生16人、地域の方4人、森の学校スタッフ3名、本学教員2名の参加の下、都留の鹿留川の大沢で開催されました。キャンプの計画、活動内容の検討や教材研究、準備

や段取り等々、全てを大学生だけでこなうことを目標に取り組んでいます。が、今どきの大学生です。テントも張ったことがなければ、火を起こした事もありません。動物観察も川遊びも初めてという彼らが、3か月の試行錯誤と苦労の後に、キャンプを成し遂げ大きく成長する姿は、傍で見守る私たち

教員にとっても、大きな感動を呼び起こします。このキャンプや森の学校への参加を通して、学生たちは地域の自然や人々、子どもたち、そして仲間たちから、大学の講義では学ぶことのない、様々な知識や経験を得、成長しています。地域から学ぶこと、それは大学で学ぶ理論に輝きをもたらすとても有効な機会になっているようです。

(さかた ゆきこ・本学初等教育学科教員)

※「シオジ森の学校」は、北都留周辺の豊かな森林環境や森と共存した地域社会の在り方を後世に伝承してゆくことを目的に、大月を中心として森林環境教育を展開しているNPOです。

## 火起こしで 学んだこと

山口紗絵子

このキャンプを通して私は、当日までの準備を含め、多くのことを学びました。今回のキャンプでは薪と炭で火を起こしてご飯とドラム缶風呂を用意することに慣れていました。私は、飯盒炊飯もドラム缶風呂も初めてで、火を起こすこと自体、その方法や必要な燃料など、わからないことだらけでした。市販の着火材を用いないで火を起こすにはどうすればいいのか、いろいろ

調べていくうちに自然の中に燃えやすい樹木(アブラチャンやスギ、マツ、シラカバなど)があり、それらを利用すればよいことがわかりました。事前の準備と練習も入念におこない、実際にそれらを燃やしてみてもパチパチと火が勢いよくついた時は感激しました。キャンプ当日は他のメンバーや地域の方の協力もあって、ドラム缶風呂・食事ともに順調に進められ、ホッとしました。

食事ではカレーやオープンサンドをメニューに取り入れましたが、子どもたちも積極的に楽しみなが調理に取り組んでくれ、とてもスムーズに進めることができました。ドラム缶風呂も



子どもたちが「気持ちいい」ととても喜んでくれて、頑張ってきたよかったなあと実感しました。このキャンプを通して私は、たくさん子どもたちの笑顔に出会い、自然にふれあうことの楽しさや喜び、自然を大切にすることが必要だということを再確認できました。大変なことでも多かつたけれど、このキャンプに参加して本当によかったと思います。

（やまぐち さえこ・本学初等教育学科3年）

## 草木染めと ビンゴを企画して

堀江 祐香

キャンプの活動の中で、私は草木染めとビンゴラリーのリーダーとして動いていました。この2つは昨年の活動にはないものだったので、もう一人のリーダーと共に一から企画を考えまし



た。何日も準備に費やしましたが、初めての内容だったのでキャンプ当日は不安もありました。活動の説明に「草木染め」という単語を使っても子どもたちはどのようなことをするのかいまいち理解できていない様子でした。そこはもつとわかりやすい言葉で考えておくべきだったと反省です。しかし、いざ植物を集めに行ったり、しおりづくりにとりかかると、みんな活発で一生懸命でした。驚いたことに、多くの子どもたちは植物や昆虫に詳しくて、私のほうが学ぶことが多かったです。キャンプの前まで雨の日が多く、ビンゴのリストであるセミの脱け殻が少なくなってしまうのですが、子どもたちは協力し合って自分の分だけでなく同じ班の子の分も見つけられています。今回のキャンプは子どもへの参加人数が多かったのでいろいろな子とふれあえてよい経験になりました。

（ほりえ ゆか・本学初等教育学科3年）

## 雷雨と川遊び

荒木 友子

今回のキャンプでは私は川遊びのリーダーを担当しました。「明日雷雨らしいよー」キャンプ前日の夕方、他のメンバーからのメールを読み、私は頭がパ

ニックになりました。川遊びが中止になったときのことを考えていなかったのです。坂田先生と相談しながら、他のメンバーと夜までかかって、川遊びのかわりにできる押し花やクラフトの用意をしました。当日、天気予報は見事に当たりました。予想はしていたものの、今までの何日も川遊びのために準備してきたことを思うと、落胆してしまいました。でも子どもたちはとても元気で、雷が鳴り響く中、炊事場を駆け回っていました。そこで、前夜に準備した押し花とクラフトではなく、二日目に予定していたスイカ割りに活動内容を急ぎよ変更しました。子どもたちは有り余るエネルギーをスイカ割りに全力投入！雷雨の中、楽しい時間が過ぎました。そして夜には雲は何処かに消え、星が見える程になっていました。二日目は見事な晴天。たくさん子どもたちが川遊びをやりたい、と言ってくれたので、ビンゴラリーの時間を早く終わらせて川遊びをすることにしました。川に入った子どもたちは、川の冷たさに驚いたりはいしゃいだり。自然のままの川に立ち向かって行く様子はとても頼もしかったです。私はこのキャンプを通して、仲間の存在の心強さと、子どもたちのパワーを感じることができました。

（あらかき ゆうこ・初等教育学科3年）

## キャンプを終えて

堀 綾乃

「あつ、顔出した！」「わー、飛んだ飛んだ！」子ども達の歓声やキラキラした瞳でムササビを見つめる姿を見て、この係の担当になって本当に良かったと思います。私は今回のキャンプで動物観察の担当を選びました。理由は動物が好きだからという実に単純なものだったのですが、一柳先生の指導のもと始まったその準備は、想像以上に大変なものでした。

動物相手なので「必ず」という言葉はありません。常に「もしも」「まさか」の事態を想定しながら何パターンもの観察の準備を現地に何度も訪れました。「大変な係を選んでしまった。」そう思ったことも何回もあります。しかし、準備の際にムササビや野ネズミを見て感動し、「同じ思いを子ども達にもしてほしい！」という気持ちが生まれ、体を奮い立たせることができました。

今回のキャンプでメインと言われた動物観察となったのはわかりませんが、子どもの生き生きとした生き物への眼差しを見ることができてとても嬉しかったです。

（ほり あやの・本学初等教育学科3年）

都留フィールド・ミュージアム構想の一角を開くものとして「都留フィールドミュージアムカフェ」がスタートし、一年が経過しました。このフィールドミュージアムカフェは、「ささやかなつながりの時間と空間」を持つことにより、フィールド・ミュージアムの意識を醸成することを目指しています。毎回市内の各所を移動しながら、持ち回りで開催されています。第三回は、6月28日、十日市場の自治会館を会場にして開催されました。

## 繋がりを生む「カフェ」という空間

河野 格

都留フィールドミュージアム・第3回十日市場カフェ。

当日は、あたたかい雰囲気の中で賑わった。学生、十日市場の人たち、都留の他の地域の人たち、都留市外の人たち。

いろんな人たちがいる。いつもと同じように、みんなが持ち寄った料理がテーブルに並ぶ。ニジマスの刺身盛り合わせ、ニジマスの炊き込みご飯、すいとん、お漬物など食べきれないほどの量が並ぶ。料理の一品持ち寄りは、このカフェがこだわっているところでもある。料理を通して人と交流し、繋がっていくことを願うからだ。また、今までと異なっていた点は、子供が多かったことだ。老若男女子供問わず、集まってご飯を食べお喋りする空間がある。一見たいそうなことではないが、地域のつながりが薄れている現代においては、とても重要なことだ。最後に富士吉田から来た中植さんのライブ。

お酒を飲みながら歌う中植さんは、独特の世界を持っていた。独特さゆえに、彼の世界と僕の世界は融合できなかったが、その異様な雰囲気がまた面白かった。

地域に根付き、人々と繋がっていくことは人間の生き方を豊かにするであろう。蜘蛛の巣のように、網の目のように、人と人、地域と地域が繋がっていくフィールドミュージアムカフェは社会を豊かにするであろう。そんな期待を胸に抱きながら僕は、今後也都留の至るところに出没する。みなさん、一度カフェに来てみてください！

(この日のいたる・本学比較文化学科4年)





## 人の輪(和)が作り出す空間 〜十日市場カフェを通して感じたもの〜

山田尚悟

私はこの都留市の十日市場という場所に1年住んでいます。しかし、なかなか近所に住む人との交流がなく、一人暮らしということもありとても寂しい気持ちで1年を過ごしていました。しかし、今回の開催地として選ばれた、十日市場という場所を知ろうと思えました。今回は自分たちの足で会場を探し、交渉して十日市場の自治会館で開催することとなりました。改めて十日市場という地域を回ってみると気づかなかったこと、知らなかったことがたくさんありました。熊太郎神社や吊るし雛の習慣など興味深い話題がたくさんあり、住んでいる人もとても人懐っこくたくさんのお話を聞くことができました。

ました。もっと早く交流しておけばよかったなと思いました。

そしてカフェ当日、私は初めて全体の司会をさせていただきました。会場の雰囲気を感じ取ったり、トラブルを解決したり、声を張ったり大変でしたがとても楽しく司会をすることができました。とても緊張しましたが、徐々にリラックスして喋れるようになっていきました。それは、スライドショーのときに自治会長さんをはじめ地域の方が面白おかしく、そして時には懐かしそうに写真について語ってください盛り上げてくださいました。ハプニングもあったのですが、皆さんの支えがあり乗り越えることができました。

あの暖かい優しい空間は照明や飾りだけで出せるものではないと思います。参加してくださった皆さんの話し声、笑顔がこの雰囲気を出してくださいました。今回のカフェでもたくさんの人と出会うことができました。この出会いを大切にいき、私も十日市場の住人として地域の輪に入れるようにしたいです。



(やまだ しょうご・本学社会学科2年)



# GROW WILD CAMP

環境教育指導者育成を目的としたGROW WILD CAMPは8月25日～29日、宝の山グリーンロッジにおいて実施いたしました。前半3日間の研修と後半2日間の私立長生保育園園児を対象にした実践の2構成です。前半の研修はベネッセコーポレーションと協働して行いました。学生は4学科から13名の参加がありました。学生が子どもたちのために企画したのは園児と2人で森の「散歩」をすることです。子どもたちと森の中で自然の不思議に出会い、感動を分かち合うというプログラムです。(指導 加藤大吾、佐藤洋、高田研)

5日間の研修を振り返ると、真っ先に蘇ってくる言葉が一つある。「ハクション」。

くしゃみの音。園児たちと一緒に歌った『にじ』という歌の歌詞の一部でもあるこの言葉は、楽しかったことや不安だったことなど、私のこの5日間の研修を象徴するような言葉だ。

園児とデートの初日、「自分らしく園児と付き合うこと」と「園児の感じたことを共有すること」、特にこの二つを大切にデートに臨んだ。園児と対面するまでの3日間、園児と周るコースなどの準備はもちろん、気持ちの上でも準備は整っていた。

しかし、その日に抱いたものは「上手くいかない」。僕が園児にしてほしいこと、体験してほしいことは実現できず、どうすればいいか分からなくなってしまった。園児とデートの2日目、自分の中ではっきりとした答えが出ないままでのデート、けれどこの日は園児と僕の間に変化が訪れた。私があるキノコに触れると、その子と一緒にキノコに触ってその感触に驚いていた。初日では起こりえなかった状況。子どもが変わった瞬間があった。

伝えることは一つでも、伝え方はたくさんある。そして子どもは瞬間、瞬間で変わっている。子どもが変わった

宮崎高虎



瞬間を見逃さないこと、子どもが変わったその瞬間に出来ることを大切にしていきたいと思った。ムズムズしてクシヤミが出るような歯がゆい気持ちも、クシヤミが出れば晴れ晴れしたい気持ち。たくさんを知り、感じ、学ぶことができた5日間だった。

キャンプが実施された二日間、全体の記録係を務めビデオカメラを回していた私は子ども達の変化に驚きを隠せなかった。

(みやざき たかとら・本学社会学科2年)

### 白戸 湊子

私は博物館実習が重なっていたため、26日夜からキャンプに合流しました。実習中、都留から離れた時間が経つにつれキャンプに途中から合流することへの不安が大きくなりました。でも宝に着いて久しぶりに会ったみんなからとても楽しそうでパワフルな雰囲気を感じ、不安がなくなりました。夜に四年生二人と喧嘩になった時間があつたから2週間分の不安が消えたと思います。

受け入れ当日はみんな落ち着かない様子でした。ペア発表中に大学生の様子を窺っていると青組さんのみんなよりも緊張した様子でした。

雨の中のデート、入浴や夕食の時間よりも最後の就寝時間がみんなそれぞれ苦労した時間だったように思います。眠れない子や、おしゃべりが止まらない子、疲れきって先に寝てしまった大学生がいました。私はペアの子の準備が終わってからの辛い時間でした。一緒に何度か外に出て部屋に戻ったりしながら「必死に準備をしたけれど、本当はこの子にはキャンプがない方がよかったですのではないか。仮にキャンプがよかったとしても私とペアを組んだこの子に悪い事をしたのでは。」という考えが頭から消えませんでした。全員が不安そうな様子で集まったミーティングの時間は、みんな辛そうな様子でしたが次の日につながる貴重な時間になりました。

二日目はみんなで体操のようなゲームをしてすっきりした気分の子供を起こしに行きました。準備に時間がかかりメインとなるデートの時間が無くなるのではないかと不安になりました。前日の反省から「一緒にどのように過ごすか。」を常に考えました。「一緒に話しながら歩いて、落ち葉を拾って、炭で落書きして、走って友達に会って、寝袋にみんなが入って、お互いにお互いを怒って喧嘩をして、仲直りをして、すぐに時間が過ぎました。昼食後に遊ぶ様子を見て、今日は私達二人にとつ

て大切な時間になったと感じることができました。お別れの時間は悲しいけれど、素敵な時間を過ごすことができました。嬉しさの両方の感情ができた時間になりました。次に会った時に「一緒に

に二日間過ごしてくれて、本当にありがとう」と伝えたいです。

(しらと けいこ・本学比較文化学科4年)



都留八朔祭りのとき(9月1日)に、イタリアレストラン「ブオーノ」のオープニングで写真展が行なわれるようになって第三回目になります(地域交流センター通信)13号を参照してください。これには、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門が、その事業として協力しています。今年は、この展示事業をおして、益子邦子氏所蔵の貴重な写真コレクションが見出され、その保存と活用に向けての話が進んでいます。

## 写真が残してくれたもの

益子邦子

「アルバム貸してくれない」その一言から父の残した写真たちの運命は大きく変わることになった。今までは我が家の一角に所在なげに積まれ、あまり顧みられることなど無かった写真たちはたくさんの人たちの眼に触れることとなった。お八朔の小さな写真展。その中で特に人目をひいたのが牛が引いた荷車の上に私と妹が乗っている写真だという。普通荷車は馬が引くものと相場が決まっていたらしい。私にとって馬より背の低い牛のほうが怖くないという以外は荷車を引くのが牛であっても馬であってもさほどどうと言うことはないのだが、やはりそうではなかったようだ。このように何の変哲もない写真が見る人によってとらえ方が違うというのが面白いと思った。

父は生活を楽しむ術をよく知っていた。よく本を読み、音楽を聴き、演劇

を鑑賞し、スポーツを愛していた。そんな父がどのような経過でカメラと出会ったのかは定かではない。私が気がついた時には既に家にはカメラがあった。家の半間の押入の下が父の現像所であった。酢酸の強烈な臭いに私たち

子どもはいつも悩まされながらも自分がどのように写っているかを楽しみにしていた。写真に撮られるという意識は少しもなかった。父の側にはいつもカメラがあり、撮影されるのが当たり前と思っていた。上手に撮って貰おうとか緊張するなんてことは全然なかったように思う。娯楽の少ない時代であったが、父が写真を撮影したいがために色々な場所に連れて行ってもらった。そんな中で松尾芭蕉の句碑を見て俳句に興味を持ちたり、色々な花の名前を覚えたりもした。また、スケートを覚えたのも金山神社の前の田圃だった。



スケートを覚えた金山神社前の田圃(昭和30年頃撮影)

父は写真を撮ると帰ってしまったが私たちは学校に間に合う時間まで滑っていた。みんなで「田圃リンク」を大切にしていた。帰りに氷上を掃き氷の下から稲わらが出ていないかを調べたりもした。夕方になると水まきに行ったりもした。そのときの写真もあるはずなのに見つからないのはとても残念である。

途中からスライド写真も加わり部屋のふすまに映し出される映像を見るのも面白かった。そんな父であったがなぜかビデオカメラには興味を示さなかった。理由はよく分からない。もっぱら写真一筋であった。そして律儀に撮影した場所、日時を書き込んでいた。

おかげでどのような毎日を送っていたか、どんな場所に連れて行ってもらったか等色々なことを知ることが出来る。父は特にお城山が好きだった。城山に向かつて歩きながら途中の桂川で水遊びをし、吊り橋を恐る恐る渡り、川棚の神社の神殿に寝転がり一休みをしたりした。神社の境内には合歡の木があり初夏には煙ったような花を咲かせていた。蝉時雨を聞くと今でもさわやかな風を頬に感じる事ができる。気がつけば孫もひ孫も高校時代は写真部に所属している。不思議な縁を感じてしまう。父は亡くなる数日前もカメラをいじっていた。そんな父であったが流石に亡くなる直前はカメラを自力で持つことは困難であった。そんな様子を

見ながら父の死期を感じていた。父が亡くなってから撮影した写真を整理しようと思ったがあまりの枚数の多さに半ばあきらめかけていた。そんな時に八朔祭りに使わせてと言う話が浮上し、その結果として都留文科大が地域交流研究センターの北垣憲仁先生のお目にとまり、まとめていた。ただける方向へと話が進んでいった。このままにしておけば時の流れの中で写真も変色し、持ち主も代替わりし何処へともなく四散してしまうことは分かり切っている。デジタル化していただき父のコレクションとして残していただきければ大変嬉しいことである。

何気なく一人の人間が趣味で撮りためたという事もない写真が都留市近辺の移り変わりを表しているというのなかなか面白いことだと改めて感じている。現在都留文科大が建っている辺りは昔は農地であった。段々畑が連なっていた。多分谷村唯一の段々畑だった様に記憶している。金山神社の横から大きいピーヤ（まじこ）に行き尾根づたいに小さいピーヤまで行きそこから谷一小の学校林を通り現在のうぐいすホール少し手前を下りてくると急に視界が開ける。そこから現在の都留文科大前駅から谷村高校にかけては一面の田んぼであった。稲だけではなく麦を作っている所もあった。その麦藁を分けて貰って蚩かごを編み夜になるとそれを持って寺川沿いに蚩を捕まえに行つた場所も今では学生マンションが建ち並んでいる。そんな場所を昔は牛が耕し、荷車を引いていた。レンゲの花が咲きその中で花輪を編んだり、秋になると山のように積んだ稲藁の上に寝ころんで高い空を眺めたりしたことを写真を見ながら思い返していた。

こんなにしみじみと写真を眺めたのは初めての経験かもしれない。もしそうだとすると昔の谷村の写真を見て私と同じような思いをする人がきつと何人かはいるに違いない。また、この写真を見て若い世代の人たちが都留の今昔に興味を持ってくれるかもしれない。



牛が引く荷車の上で妹と。左が益子邦子氏（昭和30年頃撮影）

現に八朔祭の写真を見て「ピーヤ」に興味を持って色々調べた小学生がいたという話も聞いた。これが古い写真の持つ意味なのかもしれない。父は好きなカメラで気に入った場所を撮っていただけに過ぎないが、几帳面な性格がプラスに働き、現在の場所ときちんと比較できるのではないか。だとすればこの写真を残す意味は大きいかもしれない。

この数々の写真がきちんとデータとして残され、プリントアウトされたら素晴らしいな、早く見たいという思いがわき上がって来る。母も思いがけない話に喜んでくれる。二人で写真を見ながらあれこれ昔話が出るのも父のおかげだと思ったりもしている。帽子をかぶりバッグ（中にはカメラ、露出計、三脚、フィルム、レンズなどカメラグッズが入っている）を肩にかけズックを履いた父の姿が目の前に浮かんでくる。父もきつと喜んでくれるだろう。写真たちも居場所が見つかりほつとしていることだろう。一日も早い完成を待ちながら私も古い写真をなるべくたくさん探し出そうと思う今日この頃である。

（まじこ くにご・都留市在住）

\*ピーヤ…鍛冶屋坂の導水管があるあたりが「ピーヤ」と呼ばれていたが、その名称の由来については明確ではなく、一つの研究課題となっている。



地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門では、奥隆行氏の写真コレクションのデジタル化を完了し、「地域交流センター通信」13号を参照してください。その活用の試みをはじめとしています。都留の古老たちに集まっていただき、写真を見ながら、「遊んだ記憶」を語っていただくこともその一つです。

## 「野外遊び」の聞き取りに参加して

桜井明子

11月8日、ミュージアム都留にて奥隆行さんが収集なさった写真資料を見ながら、昔の遊びについてお聞きする機会を得ました。1枚いちまいの写真から、5人の参加者がその写真にまつわる思い出を「遊んだ記憶」を中心に語ります。

まず写真の場所がどこかを特定するところから始まりました。しかし白黒の写真で背景もはつきりせず場所の特定が難しいことから、写されているものについて話題は移っていききました。

例えば、写真番号13に写された「たる」は2斗樽か4斗樽か。あるいは1斗樽か。4斗樽は味噌や醤油を入れたり漬物も漬けたりしていたそうです。その写真に写るのはもつと小さくて、水を汲むために使われていたのかも知れない。そう考えると2斗か1斗のものだろうということです。

印象深かったのは「定式」と呼ばれる江戸時代から続いている水路掃除の話。掃除をするために水をせき止めると、水路にはたくさんウナギがいて、子どもたちがそのウナギをつかまえる役に回ったのだそうです。今では数少なくなつたバイカモを、当時は金魚鉢に入れていたので「キンギョモ」と呼

んでいたとも教えていただきました。川の深さ、水の冷たさ、そこにいた生き物たちのようすが鮮明な記憶として語られます。お話してくださった方が遊んだ場所と、私の知っている都留の川のようにリンクし、子どもが遊んでいるようすを想像してみました。私もその場所を見に行つて確かめてみたいと思いました。

子どもたちは川で遊び、人々は水の流れて水車を回してお米をつき、機を織つて生活の糧を得ていました。戦前から戦後へ時代が移り変わっていくと、自然がまるごと生活に取り入れられていた頃の話。お話する皆さんからは時おり笑顔が見られ、聞き手の私たちも笑顔になっていました。あつという間のひとときでした。

(さくらい あきこ・本学社会学科4年)



「たる」が話題となった写真番号13の写真

都留市立図書館の読書週間行事として恒例、「谷の町・史の里」展が、今年も開催されました。「まちの記録と記憶」をテーマに、今回もフィールド・ミュージアム部門との共催により実施されました。  
なお「谷の町・史の里 図書館のあゆみ展」(2006)、「谷の町・史の里 まちの記憶 写真展」(2007)については、『地域交流センター通信』11号、13号を参照してください。

シリーズ第3回の今回は、市立図書館の「地域資料等電子化事業」による『デジタル広報つる』(CD・ROM版)完成記念として企画されました。展示は、電子化事業の紹介と、広報を使った企画としてA展示「広報つる」と蔵書でふり返るまちの歩み(1979~2001)フィールド・ミュージアム部門が昨年完成させたデータベース『奥隆行写真コレクション』を使ったB展示(写真とベストセラーでたどるまちの歩み(1947~1978))の二部形式で構成されました。閲覧機を利用した展示卓には年代順に広報の表紙や記事のパネル、各時期に読まれた蔵書が並べられ、書架側面の展示架には写真と当時のベストセラーが初版本で展示されました。

期間中、おおぜいの市民の皆さんが来館し、展示本を手にとり読んで、なつかしい写真の前で立ち止まる光景が多く見られたそうです。  
公共図書館には、資料の貸出サービスや学習空間などの場を提供する機能以外に、地域固有の資料を収集して提供、保存する役割があります。そして、行政からのお知らせや情報公開、市民活動の様子などを掲載する自治体の広報誌は、後世に残すべき大切な資料(記録)です。これを永く保存し、またインターネット等で広く活用するため、都留市では「地域資料等電子化事業(平成15~19年度)」を行い、約23年分(1979

フィールド・ミュージアム部門

市立図書館との連携事業の報告

谷の町・史の里  
まちの記録・記憶展

～まちの歩みと私たちの読んだ本～

2008年10月28日~11月9日



年(2001年6月)の『広報つる』を電子データ化しました。このデータ作成作業は、市立図書館協力員である小池利成さん、野口政夫さんの手によって行われました。図書館活動への市民参加という試みは近年各地で行われていますが、このような本格的な例はめずらしいでしょう。また、本来図書館の評価は、貸出冊数等、数値目標の達成率をみるだけでなく、事業や文化行事の実績もあわせ、総合的になされるべきものです。都留市立図書館が事業の成果をいかに、資料展示など、読書推進や図書館の利用促進につながる活動を続けていることは、高く評価されてよいでしょう。



B展示(1947~1978)から、こどもたちと『あたらしい憲法のはなし』(1947)

\*写真とベストセラー、『アンネの日記』、『君の名は』(53)、『にあんちゃん』(59)、『愛と死をみつめて』(64)、『ルーツ』(77)、ほかを展示。上記には——終戦から2年、寺の石段であそぶ仲良し。この笑顔のこどもたちがやがて新しい時代を担ってゆく。『あたらしい憲法のはなし』は、1947(昭22)年公布の日本国憲法を解説するため文部省が中学1年生に配布した教科書。「……よその国となかよくして、世界中の国が、よい友だちになって……あのおそろしい戦争が、二度と起こらないように、また起こさないようにいたしましょう。」(同書、六、戦争の放棄より)——との解説が添えられた。



電子化事業の紹介とA展示(1979~2001)

\*電子化事業の概要を紹介。また、電子化された広報から、市役所駐車場の朝市(79)、かいじ国体(86)、市民待望の市立病院の完成やE電の富士急線乗り入れ(90)、未曾有の豪雪(98)ほか、市民の記憶に深く残る表紙や記事と、当時読まれた『怒ぎわのトットちゃん』(81)、『サラダ記念日』(84)、『マディソン郡の橋』(94)、『ハリー・ポッターと賢者の石』(99)、ほかを展示。

市民と市行政とフィールド・ミュージアム部門との共同でビオトープづくりが始まりました。

## 三ノ側ビオトープの設置にあたって

杉本 清

環境担当1年生として都留市の環境行政に従事しております。

都留市環境保全市民会議\*・事務局担当として、市民部会で前年度に決定された、花いっぱい運動を進めようと、大学前駅横の空地の花壇作りに取りかかりました。

最大の協力者は提案者の佐藤和徳さんです。佐藤さんのペースでつつい現場に引き出され進んでいきました。

6月20日、環境問題を学ぶ文大生と市民部会のメンバーによる平成の名水百選に選ばれた、十日市場・夏狩湧水群の清掃活動を行いました。終了後、花壇作りに取り掛かりかかる。面積が広く、この広い面積を市民部会で管理できるか、全部花を植えるにはお金がかかりすぎるのではないか、など作業をしながら考える。休憩中、日陰を求めて駅構内の待合室で地域交流研究センターの活動内容を見る。涼しさを呼ぶ写真、大学付近の草花、てんとう虫、蝶やトンボの写真と説明文などがあり、待合室には自然が呼んでいます。改札

口の駅員さんに聞いたところ大学の先生が定期的に構内に蝶やトンボが好む鉢植えを交換しているとのことでした。

この活動と私たちの活動と一緒にできないかと考え、メンバーに相談したところ他の方も、同じ考えのようでした。後日、佐藤さんと地域交流研究センターに相談に伺いました。私たちの活動内容を説明したところ、検討していた、だけとのことでした。

市民部会で歩道側1m巾花を植栽する、残りはビオトープとして活用する、ということ話が進みました。

いよいよ花壇とビオトープ作りです。耕運機で耕そうとしましたが石が多くためです。大きな石を拾い、表土は佐藤さんが水道業者にお願いして搬入してもらおうことになりました。山から間伐材を運んで歩道に土がこぼれないようにしました。いよいよ花の植栽です。天野会長よりたくさんの苗をいただきます。隣の駅からは水を頂いております。私たちの知らない間に、学生たちも着々とビオトープ作りに励ん

でいます。花壇の横にはたくさんのコスモスを植えていただきました。今、コスモスがいっぱい咲いています。春には菜の花やレンゲが咲くようです。楽しみしててください。知らず知らずのうちたくさんの人の協力を受け完成しました。

こんな活動の中から少しずつ私の行おうとする仕事が見えてきているような気がします。

8月の暑い日、環境保護活動のために三ツ峠に登りました。頂上直下にレンジョウウマの群生地がありました。花が下を向き淡いピンク色できれいな花でした。グンナイフウロウも見つかりました。その上を多数の蝶が飛んでいました。最近テレビで見た蝶のよう

です。日本列島を南から北に旅する蝶です。戻つてすぐにインターネットで調べました。間違いなくテレビで見たアサギマダラです。北米大陸を南から北に旅する蝶はよく知られています。私たちの周りにも同じような蝶が体験できるとは驚きです。

これを天野会長に話したところ、昔はたくさんのアサギマダラが三ツ峠にいたとのこと。市内にたくさんのビオトープをつくり蝶やトンボがたくさん戻ってくる昔の環境になればと思いました。

三ノ側ビオトープ前にもうすぐ素敵な案内板が設置されます。設置するの

は市ですが、案内板の説明・管理は地域交流研究センターの学生の担当です。駅の待合室のフィールドノートの掲示板から三ノ側ビオトープに誘われて、さらに大学周辺のフィールド・ミュージアムの散策へと足をのびられたらいかがですか。きつと素敵な自然体験ができると思います。

(すぎもと きよし・都留市役所市民生活課)

\*都留市環境基本計画の推進・管理を行う組織です。市民部会、事業者部会、教育部会から成る





地域交流研究センター内にオープン・アーカイブのスペースを設置しました。これは、市内の小・中学校などの教育機関や市民団体などの資料を通じた交流の拠点となります。

## 「オープン・アーカイブ」への期待

小口尚良

地域の自然の価値を知らせる、伝える、共有するためにはまずそれを知ることが前提となります。そしてそのた

めには、長い時間と労力が必要だと感じます。自然はそこにいけばあるのですが、たとえばノウサギに会いたいと思つてノウサギのすんでいるうら山にでかけてもまず会うことはできません。でも何度も行っているうちに、フィールドサイン（糞や食べあと）を見つけたり、運良く出くわしたりするのです。コンビニとはちがい何かに会いたいというこちらの要求に必ずしも答えてくれないけれど、行けば（相手に合わせれば）何らかの出会いや発見があるのが自然だと思えます。

この幸運な出会いや経験をみんなで共有することから地域の価値をみんなで共有することが始まるのだと思います。そのためツールがフィールドでの記録、標本や剥製、写真、映像です。これを個人で收拾し、整理、保管するのは大変なことで、時間や労力、空間の面で無理が生じ、大切な財産が埋も

れ、散逸してしまっているのが現状ではないかと思えます。

今回発足する地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門が取り組む資料の目録づくりと貸し出し（「オープン・アーカイブ」）は、このような問題を克服し、地域の自然の価値の共有につながっていくものだと考え大きな期待を抱いています。

2010年度からの多くの教育機関や団体で活用してもらえよう、私もその一員として「オープン・アーカイブ」の整備を進めていきたいと思います。

（おぐち ひさよし・東桂小学校教員）



市民の皆さんから提供していただいた写真などもていねいに整理、保管していきます。

## (山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取り組み)

市から土地をお借りして、「菜園's」のサークルのメンバー全体でおもにサツマイモやカボチャを、各個人でネギやピーマンなどを育てています。周りに畑をお持ちの市民の方に野菜について教えていただいたり、仲間と一緒に畑で「旬」の野菜を収穫できたり、充実した活動となっています。

3



3年前にスタートした田んぼづくり。当初は農業委員さんにご指導いただきましたが、今年度は、これまで教えていただいたことを土台に、自立(律)的な米づくりに挑戦すべく、社会学科、初等教育学科、国文学科から学生15名と5名の教員の参加を得て再スタートしました。いもち病にかかる等、困難もありましたが、約600平米の田んぼから粳で約360キロの収穫を得ました。



社会学科環境・コミュニティ創造専攻の1年生6名が市内の耕作放棄地を少しでも少なくしようと、自ら畑を耕しています。大学裏山の比較的荒廃した農地100坪程度を都留市から提供していただき、すでに種まき・植付けを終えたところです。

7



地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門の機関誌『フィールド・ノート』編集部の学生が中心となり、十日市場の中屋敷で稲作や麦作り、梅やプラム、柿など果樹の手入れに取り組んでいます。地主の渡辺宗男さんのご厚意で2000年から始めました。農作業をしながらサルやイノシシなど大型獣との共存のあり方にも関心を寄せています。



1



上戸沢の畑は、2004年の3月に、大きな棚田を畑地転用した土地（450平米）を借用して始めました。初等教育学科西本ゼミの3年生を中心に毎年10名程度の学生と、四季折々の野菜を有機無農薬で育て、収穫しています。小麦や蕎麦にも挑戦しています。

2



# 市民に支えられて 田畑を耕しています

学生たちが大家さんの畑づくりを手伝いながらおいしい野菜を存分に食べさせてもらっているといった、暖かな市民との交流のことも伝え聞きます。実は、大学関係者と畑との関わりはさまざまにあるようです。

本号では、その全体像をつかんでみよう、学生や教職員が市民の理解や支えを得ながら田畑を耕しているという事例を集め、それを絵地図風に、写真と短文で紹介することを考えました。

食料自給率問題に絡む休耕地利用というホットな実際的なテーマもありますが、面積の大小に関わらず、一つの田畑を耕し作物をつくるということによって初めて見えてくるもの、感じられてくることなどがあると思います。隣人の善さを感じ入ったりすることもあるでしょう。

こうした経験は、教員養成系の大学として独特の実習農場（フィールド）をもつことなど、さまざまな夢の素地にもなっていくでしょう。

この絵地図は、現在進行中のものだけを集めました、準備不足ということもあって完全ではありません。編集部としては、これからも関心を持ち続けようと思いますので、情報をお寄せください。〔編集部〕



4



通勤の行き帰りに、手を入れることができる畑を探し求めた結果、都留文科大学の教務ご担当の中村吟子さんのご厚意で、線路脇の土地60平米をお借りすることができました。ここで木下邦太郎先生他、教員3名が、ささやかながら野菜を育てています。元来宅地のため、土づくりなど課題が多いのですが、夏場は豆類や芋類などの収穫を楽しめました。

5



写真は昨年の、市民（市役所の産業観光課の方）にご指導をいただきながらの、サツマイモの苗植えの情景です。ワクワク都留のメンバーが中心で、収穫した芋は学童保育の子どもたちと一っしょに調理しました。これまで、カボチャ、トマト、キュウリ、ナスなどを栽培してきました。今後、収穫物を使って近隣のみなさんとパーベキューなどをやってみたいです。

6



# 野外観察会を開催する

西 教生

都留文科大学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアムでは今年、6月に「オトシブミ観察会」、8月に「夏の森を歩こう」、10月に「都留文大周辺探鳥会」の3つの観察会を行いました。これらの観察会は学内はもとより、都留市内外の方々にも参加していただきたいと、ポスターやホームページで参加者を募りました。

6月21日の「オトシブミ観察会」の参加者は6名。当日は小雨でしたが、附属図書館のビオトープや1号館前の植えこみ、美術棟の裏をゆっくりと歩きながらオトシブミ類やその揺籃ようらんを観察しました。オトシブミ類の活動のピークは少し過ぎていましたが、ドロハマキチヨツキリやカシルリオトシブミがよく見られました。参加者からは「あんなに小さい虫が、自分の何倍もある葉をまくという自然の力みたいいなものを感じました。楽しかったです」という感想がありました。

8月3日の「夏の森を歩こう」には14名が参加しました。大学に集合し、文大通りの測道を鍛冶屋坂に向かいます。途中、都留市では珍しいトノサマガエルを発見しました。鍛冶屋坂から山へ入り、尾根に沿って楽山公園を目

指します。カワラナデシコの花やツノハシバミの実、樹液に集まるカナブンやカプトムシが見られました。ミツバアケビの実やユウスゲの花、ヒノキに残ったシカの食べ跡を観察し、クロモジやイヌザンショウの葉の匂いを嗅ぎます。日陰で休憩後、楽山公園を経て自然科学棟の2階へ。散策会の感想を交換して終了しました。

都留市で初めて開催された探鳥会(鳥の観察会)は秋晴れの10月19日でした。この探鳥会はやまなし野鳥の会・日本野鳥の会甲府支部が企画したもので、大学周辺での探鳥会の依頼があったことから「都留文大周辺探鳥会」を行ないました。探鳥会には25名の参加者があり、北杜市や甲府市などから多くの方に参加していただきました。大学の駐車場を出発し、裏山を歩き、附属図書館前を通って駐車場に戻ってくるコースでした。モズやホオジロ、トビやアオサギなど19種の鳥類を観察できました。最後に、駐車場で探鳥会の間に見られた鳥を1種類ずつ確認、説明する「鳥合わせ」をして解散しました。

(左) のりお・都留文科大学現代GP研究員



# 平成20年度現職教員教育講座

テーマ 教師の子ども理解と学習指導  
日時 平成20年7月30日(水)～8月1日(金)  
会場 本学2号館101教室

## 日程と内容

7月30日

「開会挨拶と講座説明」・西本勝美(本学教授・地域交流研究センター長)

「総論1 学校の現状と課題」・西本勝美(本学初等教育学科教授)

「総論2 子ども理解と生活指導——現実を支えること、内面をささえること——」・筒井潤子(本学初等教育学科講師)

7月31日

会場 本学2号館101教室

講座A 「読解力」を高める授業づくり・鶴田誠司(本学初等教育学科教授)

講座B 惹きつけ、つなげる授業づくり・不破修(本学初等教育学科非常勤講師)

## 力をもらえる夏の講座

渋谷正博

四年ほど前、都留文科大学の現職教員講座を受講する機会に恵まれました。昭和五十五年に特別編入生として一年間お世話になった大学です。

実際の教育法を研修しながら二十数年勤務してきましたが、ここ数年の学校現場の変わりようにはさまざまなものがあります。学校・教師バッシング、モンスターペアレント、現場にそぐわぬ教育改革。そんなものとは無関係に起こる学級と個々の子どもたちの問題。

そこへPISA調査の結果とフィンランド教育への一方的な崇拜の雰囲気。いったい何を信じたらよいのだろうか、何をよりどころにしたらよいのだろうか。そんなモヤモヤした思いでいっぱいでした。

そして出会ったのが筒井潤子先生のカウンセラーとして個々の子どもたちと真摯にふれ合う実践を中心とした講義でした。そして、佐藤隆先生をはじめとしてフィンランドを視察され、当地の学力、学校、教師や子どもたち、地域の考え方を調査・分析された講義にもふれることができました。その時の胸のつかえがスーッとおりてくるような感覚は今もはっきり覚えています。

今年も筒井先生にお会いできました。そして西本勝美先生の地域と学校についての講義。やみくもに学校選択や統合が叫ばれる都会の学校つて、これでよいのだろうかという思いにさせられました。やはり、学校は地域の文化の中心であるべきではないのかと…。

全日程出席は公務の関係で無理な年もあるのですが、今後もできる限りこの研修を受けさせて頂き、新たな発見と、そして現場に携わる者としての自信を取り戻していきたいと思えます。

(しづやまさひろ 川崎市立小倉小学校教諭)



## 都留市子ども教室事業を紹介します

西本勝美

都留市では市内の四つの小学校（東桂小・谷二小・宝小・旭小）を拠点として「子ども教室」事業を推進しています。この事業は五年前に文部科学省のパイロット事業として受託した活動を都留市が独自に発展させたもので、活動の広がりと充実ぶりは県下でも高く評価されています。  
本学の学生には学生指導員としての派遣要請があ



り、毎年たくさんの方が、地域のみならずとくに、この活動に参加しています。学生指導員が入るおもな活動は「遊び」と「読書・学習支援」です。教職志望者の多い本学にはうってつけの活動で、三年次からの教育実習やSATとはひと味違った、気軽に、楽しく子どもたちと接することができる二年次向きの体験活動として定着しています。リピーター学生が多いのも特徴です。活動のようすと体験談を、二人の学生に語ってもらいました。

（にしもと かつみ・本学初等教育学科教員、地域交流研究センター長

## 達成感のようなものを感じました

前田佳南美

「子ども教室」での私の活動は、おもに放課後の「遊び」の補助員として子どもたちをまとめることでした。子どもたちはそれぞれにグループを作って野球やバドミントンなどの遊びを始めるので、私は全体の安全面に注意を払いながら、いずれかのグループに入りいっしょに遊ぶといった感じでした。後半にはなるべく全員でできるような、ドッジボールや長縄などの遊びを提案しました。子どもたちが楽しそうに自分の提案した遊びをしているのを見たときに、達成感のようなものを感じました。

子どもたちはとても素直で元気よく、笑顔で活発だという印象が強かったですが、素直な分、やはり思い通りにいかないことは多かったです。意見の食い違いからけんかが始まることもあり、意志の強い





子の意見だけが尊重されないようにしながら子どもをまとめたりと、指導の難しさを知りました。大変なこともあったけれど、楽しんでやれたことで得たものは多くあります。様々な状況に応じた対処の仕方など、経験を積んでつかんでいくものだと感じました。

(まえだ かなみ・本学初等教育学科3年)

## 毎回の活動がとても充実

山城理乃

たくさんある活動の中で、私が最初に参加したのは「昔の遊び」という活動でした。「めんこ」をして遊んだのですが、約一〇人の子どもたちが、みんな汗をかくほど夢中になっていました。TVゲームなどで遊ぶのとは違い、子どもたちはコミュニケーションを取り合い、新しいルールを作ったりと、工夫しながら楽しんでいました。このほかに、「読書・学習支援」の活動にも参加しました。夏休みの宿題の支援、紙芝居、また辞書・図鑑の使い方や教え、自ら学習するように支援しました。

困った時には、指導員や地域の人たちがサポートしてくれて、毎回の活動がとても充実しています。子どもたちが意欲的で、その気持ちに応えるために教師を目指す者として向上することができます。地域と学校がこんなに密接にかかわり、協力しあっているのは、子どもたちにとって素晴らしい環境だと思います。

(やましろ りの・本学初等教育学科3年)

# つる子どもまつり 市民連絡会を発足させて

岩間泰司



つる子どもまつりも2009年には第40回を迎えます。

振り返ってみますと、「あすなる職人会」として私が実行委員会に参加してから15年になります。

つる子どもまつり実行委員会には、学生以外に、市民として個人的に参加している場合（現在6名くらい）と団体として参加している場合があります。

これらの参加者、団体は、子どもまつり当日は、子どもまつりの意義や目的をふまえ、「くに」企画（\*注「地域交流センター通信」第6号を参照してください）をします。個人的に参加している人は、全体企画の中で、それぞれの部署に参加し運営や活動をしています。参加者それぞれに、子どもたちが満足する一日であるように、工夫をこらします。

しかし今までは、個人、団体間の交流もなく、実際に当日の子どもたちの様子や団体がどのように活動しているのかを詳細に把握することはできませんでした。たとえば、子どもまつり終了後の実行委員会での反省の段階でも、団体としては組織内での反省もできませんが、深めることがなかなかできません。ましてや、個人としては持ち帰るところもなく、良し悪しの評価もできず、何かむなししい思いをするような状況もできます。何らかの対応を考えなければ、実行委員会への参加者が無くなっていくのではないだろうかという危機感すら生まれています。

2009年には、四十周年を迎えます。それぞれ





の団体としても、先輩たちが努力して積み上げてきた運動を継承し、さらに発展させていきたいと思っています。この四十年という節を新たなスタートとしたいという願いから、実行委員会に参加している市民や団体に働きかけ、今年の八月八日の夜に話し合いの場をもつことにしました（文化会館会議室にて）。そこではまず、発起人が市民連絡会を持つまでの経緯を話し、それから参加した個人と団体代表が、会の目的や日常活動、現状と課題について紹介しました。

「新日本婦人の会」からは、会の誕生や歴史と日常活動、子どもまつりに参加した動機および現状と課題などが話されました。「親と子のよい映画をみる会」からは、会が子ども文化の危機的状況の中で誕生したこと、子どもまつり運動の目的に賛同し参加したことなどが報告されました。「和太

鼓みのり」からは、「八朔inつる」の事務局のメンバーが中心となり、「私たちの街は私たちの手で」をスローガンに活動し、さまざまな行事や祭りに参加してきていることが話されました。「あすなる職人会」はさまざまな職種の職人の会ですが、子どもまつりへは、私自身は子どもころから参加し、現在は父親として、当日は自分の子どもと参加していることを話しました。「都留詩友会」からは、つる子どもまつりには当初、幼年教育研究会として教職にある先生たちと参加したこと、地域の中で共に子育てをしていこうというねらいをもっていたこと、その後中心になっていた都留詩友会の会員が会に呼びかけ参加したこと、都留詩友会には、つる子どもまつり実行委員の学生七名が入会していること、などが語られました。また個人として参加されている方々からは、個人参加の目的や悩み、課題について話されました。

詳細については紙面の関係上ここでは述べきれないが、共通して言えることは、各団体が、四十年という歳月の中で、実行委員会へ出席する代表が高齢化しているにもかかわらず、若者の育成がなかなかできないことです。

現状のままだと今後、子どもまつり実行委員会への参加する市民は消滅してしまうのではないかとこの危機感があります。そのことへの取組も踏まえ、今回の話し合いは、お互いの団体間の理解を深め、課題を共有することができました。

最後に、各個人、団体として、「つる子どもまつり市民連絡会」（代表・岩間、門脇法子）の設立を承認し、参加することを確認しました。

（いわま たいじ・都留市「あすなる職人会」）

# 「うまいもの市in都留」を企画して

山内翔太

8月2日、びゅあ富士調理室にて、市民の方々に、都留市と学生のふるさとをつなぐ企画「うまいもの市in都留」を行いました。

企画の内容は、全国各地から集まっている文大生が講師となって郷土料理を紹介し、参加者のみなさんと一緒に作っていく料理教室のような形です。料理は、全国を4ブロックに分け、北海道チームは「いももち」、東日本チームは「こづゆ」（福島県）、中日本チームは「遠州風お好み焼き」（静岡県）、西日本チームは「せんざんき」（愛媛県）を作りました。加えて、「食」といった面だけではなく、もっと広くそれぞれの地元を知ってもらうために、3問地元紹介クイズを行ったり、地元を紹介した冊子を作り配ったりしました。

そもそも「うまいもの市in都留」を企画したきっかけは、私自身が「地元が大好きなこと」、そして「市民の方々と直にふれあいたいこと」、それらを形にできたら最高ではないかといった所から始まりました。企画を考え始めた頃は、どのように形にしたらよいのか正直葛藤もありました。それでも、何回かわくわく都留の会議の中で発案をしていき、仲間から助言をもらっていくと、直に交流することができ、参加者の方にも興味をもってもらいやすい「食」といった面で企画をしてみようということになりました。こうして、当初は私自身の思い(エゴ)だけであったものが、仲間の思いと合体し、「うまいもの市

in都留」という形で企画とすることができました。

当日は、定員が満員御礼となり、たくさんの市民のみなさんに参加して頂きました。ここでは、「知らなかった」、「初めて見た」といった驚きや、「そんなに遠くから来ているの」といった声が飛び交いました。逆に、私たち自身も「山梨では違った作り方をするのですか」といったように、参加者のみなさんから教えて頂くことが数多くありました。そこには、主催者・参加者、相互の「あたたかな会話でつなぐ学びの場」がありました。心温まる至福のひとつでした。

最後になりますが、「うまいもの市in都留」を実現するに向けて、市民の方を含めた数多くの方々から協力して頂きました。準備の段階でも、心温まる交流・支援がありました。そうしたみなさんの一つ一つの協力があつたからこそ「思いが形になった」と思います。本当にありがとうございます。これからも、わくわく都留の活動において、「人との交流でつなぐあたたかなまちづくり」を実践していきたいと思っています。

(やまうち しょうた、本学社会学科3年)







## 「うまいもの市」に参加して

大澤諒太

おかあさんと妹といきました。こずゆをつくるとうばんでした。まずきくらげを、水にもどしました。そのあとにきくらげの、かたいところをとりました。にんじんと、さといもと、こんにやくと、きくらげとぎんなんと、おふをなべにいれてにました。むづかしかったところは、なべの中のぐをまぜることがむづかしかったです。かんたんだったことは、ぐをなべにいれることがかんたんでした。となりのへやにいつて、みんなでごはんをたべました。とてもおいしかったです。

またあるといいです。とてもおもしろかったです。またあつたらいいと思います。

(おおさわ りょうた 禾生第一小学校三年)

大澤夏江

今回小学校三年の息子が料理に興味があつたことと、毎日の料理作りに少しだけヒントにさせてもらおうと思ひ参加しました。

初めて聞く料理名もあり驚きました。奥深いことを感じさせられました。子どもたちも集中して一生けんめい料理している姿が見られたので、連れてきてよかったです。私もヒントをもらえてうれしかったです。ちよつとの工夫でいつもと違つことができ、料理以外の勉強にもなりました。

子どもたちも大満足で、何か別の企画のときにも参加させてもらおうと思つています。有意義な時間をすごすことができ、うれしく思います。ありがとうございます。

(おおさわ なつえ 諒太くんのお母さん)

# 都留でのキャッチボール

関ひな子



わたしたち女子ソフトボール同好会は、都留市の一般女子リーグに登録しています。

わたしたちの最大のイベントは、年に四回ある都留市大会です。このためにメンバーは一生懸命に練習をしています。この大会で都留市の一般女子に登録しているのは、現在、「禾生オリーブ」と「都留文科大学」の2チームです。ですから毎回どちらかが優勝、準優勝になります。どちらかというとな禾生オリーブの方が勝率がいいでしょう。

永遠のライバルともいえる禾生オリーブ（通称オリーブさん）とわたしたちのチーム。じつはとても仲がいいのです。オリーブさんは一般の女性のチームです（ママさんチームとも言います）。一緒に楽しく練習をします。メンバーが足りないときは相手チームになります。

試合後の飲み会はもちろんのこと。ボーリング大会にカラオケ大会。若いわたしたちと もつと若い（？）オリーブさんたちとのコラボレーションです。

この原稿依頼を機に、文大チームとオリーブさんのなれそめを聞いたところ、オリーブのメンバーの娘さんが都留文科大学に入学し、それを機に文大チームが都留市リーグに登録したとのことでした。いらい今年で七年、交流を続けてもらっています。

オリーブの監督さんは、自称「都留の母」。工場を営んでいます。社長さんです。わたしたちをいつでもアルバイトに迎えてくれます。その帰りには

お土産をたくさん持たせてくれます。お昼にはおいしいご飯を食べさせてくれます。人生訓をスナックのカウンターで教えてくれます。

ソフトボールですから女性ばかりです。わたしたちのように若い者から人生経験豊富な方までさまざまな女性がグラウンドに集まります。いろいろなことを学びながらキャッチボールをします。地域のママさんパワーが文大ソフトボール同好会を支えてくれます。心から感謝しています。

（せき ひなこ・都留文科大学女子ソフトボール同好会主将）



7月の都留市大会で、やっと禾生オリーブに勝つ事ができました。なかなかの熱戦でした。

# 第23回 都留音楽祭

東西古楽の真夏の祭典が開催されました  
2008年8月16日(土)〜20日(水) 会場・都の杜うぐいすホールほか



## 都留音楽祭2008レポート

増永 弦

都留文科大学の音楽棟が完成したことを契機に、有村祐輔教授が1986年8月に始めた都留音楽祭は、都留音楽祭実行委員会主催、さらに財団法人都留音楽協会主催という体制に発展し、今年は23回目となりました。毎年日本中から参加者が集まり、また海外からの参加者を迎え、ヨーロッパの古楽を核にして多彩な音楽の交流が展開されてきました。今年の都留音楽祭に参加した増永弦さんが、8月16日から20日までを日記風に綴ってくれました。その抜粋を掲載します。



チェンバロとチェロのアンサンブルのレッスン風景 (うぐいすホールにて)

8月16日

ぼくは、京都から初めて参加したので、行き方に自信がないといっても過言ではありませんでした。大月駅に着いて富士急行線に乗り換えました。まわりを見ると、同じ都留行きらしき人たちがたくさんいて、あ、仲間だな、と思いました。その後、セミナーの打ち合わせで、フォルテピアノの小倉先生と初のご対面。楽しくて、勉強になるレッスンになるだろうな、と思いました。

8月17日

今日から古楽セミナーのレッスンが始まります。フォルテピアノが2台もある部屋でレッスンをしました。他人の個人レッスンを見ていると大切なポイントがあったので、それを紙にメモしたりしました。とても勉強になる時間でした。昼食時には事前に申し込んだ人たちが曲を演奏しました。ここでは演奏に聴き入ってしまう人もいました。楽しい演奏をたくさん聴いてきました。

午後は、ワークショップ。チェンバロにさわらしてもらい、きれいな音を指で、体で感じました。この時間は、次の、全員でアンサンブルする曲のオルガンのパートを練習しました。このとき初めて楽譜

を見たので、次の全員アンサンブルレッスンのとき、まったくと言っていいほど弾けませんでした。

8月18日

今日のワークショップでは、昨日練習した成果が分かるほどにまでなっていました。その後のアンサンブルレッスンでは昨日まったくついていけなかったのが、完璧についていけるようになっていて、「オレ、やれるじゃん!!」と思っちゃいました。その後は弁当を食べて、海外ソリストのロベルト・マメーリさんのソプラノリサイタル。ホールに響くすばらしい歌声を聴いて感動した気持ちそのままに宿舎へ移動。

8月19日

今日で古楽セミナーのレッスンは最後。実はこの日、お昼のコンサートに出ることになっていて、このレッスンで総仕上げでした。本当にたった3回のレッスンだったけれど、フォルテピアノとふれあい、心から楽しみ、勉強することができました。昼食時のコンサートは大成。最後のワークショップまで、興味のある話をしてもらえました。：

8月20日

ホールへ移動して、コンサートのリハーサル。本番の位置で練習。感じをつかむことができました。いよいよ本番。リコーダーアンサンブル、バロックダンス。そしてぼくらの出番。ちゃんと弾けて成功しました。この5日間、まったく別世界へ行ってきたような感じです。こんなに楽しく音楽に囲まれた5日間、本当に勉強になったし、とても幸せでした。来年もまた参加したいと心より願う音楽祭です。

(ますなが げん・京都府の小学5年生)

## 編集後記

○巻頭文は画家で絵本作家としても著名な津田櫓冬氏に執筆をお願いしました。氏の子ども時代が、自然の風景とともに鮮やかに語られていますが、読みながら私の子ども時代も風景とともにさまざまに甦ってきます。子ども時代のふるさとが懐かしいのは、そのときゆたかな人間のふるさと感じとっていたからでしょうか。

○特集1は、地域を基盤にした教師養成という実践と探究の積み重ねに光をあてました。学生アシスタント・ティーチャー（SAT）を結節点として、子ども、学生、教師、研究者の関わりなかに大切な意欲が育ってきています。佐藤隆氏が紹介するフィンランドやカナダの試みは、個性的に教育本質を問う方向をもつ教師養成のあり方を考えさせてくれます。

○特集2は、フィールド・ミュージアムの実践の多彩な展開をとらえようとしてしました。オープンカフェでの写真展示の積み重ねから貴重な写真コレクションが見出されるなど、事業の積み重ねを素地に新しい展開が次々と生まれています。都留文科大学前駅横の「三ノ側ビオトープ」作りなど、ワクワクさせるものがあります。富士急行とフィールド・ミュージアムとの連携事業もスタートし、11月19日には市役所の職員も参加して初会合が開催されました（15号で紹介する予定です）。

○二つのキャンプやつる子どもまつり、都留市子ども教室など、特集2やトピックスの多くの事例が特集1の世界と連続しているということも（巻頭文とも共鳴しているということも）、編集作業をしていて改めて思いました。

○女子ソフトボール同好会の記事は、学生たちがどんなに市民の方々に深く支えられているかを教えてくれ、うれしくなります。

○ところで、都留文科大学の自然科学棟がテントウムシの越冬場所になっていることは、新妻昭夫編『ナチュラルスト入門 落葉の手紙』（岩波ブックレットNo.152）で詳しく紹介されており広く知られています。私の研究室がある2号館にも毎年夥しいテントウムシがやってきますが、今年は10月29日、11月4日に観察されました（さらに翌週末にも観察されたようです）。けれども2号館のテントウムシたちは、すべて掃除の対象になってしまいました。何とか丁寧に観察していきたい気持ちが湧いています。その飛来のさまは感動的ですよ。

○次号は、社会学科の環境・コミュニティ創造専攻の取り組みを地域交流研究センターの角度から特集する予定です。

（編集長・畑潤）



絵・成瀬洋平（本学比較文化学科卒業生）